



プライベート
ベート



川崎ゆきお

「プライベートとは何でしょうか」

「私的なことでしょ」

「個人的なことなんですね」

「そうそう、プライベートな時間とか言うでしょ」

「それは仕事との絡みですか」

「絡み？」

「はい、仕事の時間とプライベートな時間。今は仕事の時間で、今はプライベートな時間を過ごすとか。ですから仕事と対になっているような気がするのです。これは仕事ではなく、プライベートだ、と言う感じで」

「じゃ、仕事をしていない人は、全部プライベートかね」

「ああ、全部じゃないと思います」

「仕事と対じゃなく、プライベートの対はパブリックだ」

「私的か、公的かということですか」

「単純に言えばね」

「仕事は公的ですよ」

「個人的な仕事もあるしね。一概には言えないが」

「僕が考えるには、全てがプライベートじゃないでしょうか」

「ほう」

「仕事も私的じゃないですか」

「その仕事が色々な一と関係してくると、個人の力では收拾が付かなくなるでしょ。自分の世界だけで終わらない。赤の他人にも響を与える」

「それをやっているのは個人でしょ」

「そうだよ。社会人としての個人だ」

「公務員のようなものですね」

「公務員だけとは限らん。どんな職業でも、その仕事をやる場合、個人的な思惑は反映させない方がいい。実際には、そうじゃないけどね」

「役になりきっている人がいいんですね」

「その役で、食っているんだから。しかし、その線引きは曖昧だな」

「はい」

「まあ、難しく考えることはない。君が思っているように、仕事が終わればあとはプライベートだ」

「あのう」

「何かね」

「仕事をやっていないのですが」

「それで、全部プライベートだと言っているのか。なるほど」

「公的なこともしていません。だから、パブリックもありません」

「しかし、親類が集まる法事や、村の祭りがあるだろう」

「法事はプライベートなことじゃないのですか。よく、法事を理由に会社を休んだりしますよ。夏祭りも、休みを取って参加しました。これもプライベートですよ」

「じゃ、市民運動などに参加すればいい」

「怖いことを」

「何が怖いのかね」

「市民税を払っていません」

「そこに基準を置くか」

「市民が分かりません」

「だから、市民と対になっているものを考えればよろしい」

「市民運動って、社会的ですねえ。だから、政府や団体に対して何かもの申すような感じですよね。でも僕は政治が分かりません。衆議院と参議院の違いも分かりません。そんな状態で、市民運動など出来ませんよね。それに、市民運動に個人的に参加するわけですから、これもプライベートな時間を使ってやるわけでしょ」

「まあ、そうなんだがね」

「政府から要請があれば、市民運動に参加しやすいです。これなら公的なお墨付きを貰ったわけですから。公務に近いです」

「それはないと思うがね。あるとすれば、やらせだろう」

「やはり、仕事をしていないと、プライベートという言葉は使えませんねえ」

「だから君の場合、使う必要はないのかもしれないねえ。言葉とは分けるためにあるようなものだから、分ける必要がなければ、私的か公的かの問題はないのだから」

「先生は今どういう時間ですか」

「何が」

「だから、ここでこうして話しているときは」

「プライベートだろう」

「ああ、そうなんですか」

「じゃ、講義があるので、失礼するよ」

「また、来てよろしいですか」

「君は在学中、何を聞いていた。今言ったことは、全て教えたはずだがね」

「忘れました」

「便利な言葉だ」

「でも、先生のごことは忘れていませんよ」

「結局、こういう教え子しか残らないか」

「いいでしょ」

「ああ」

